「学術の泉」としての ComEX

ComEX 編集委員長 関屋大雄
Hiroo Sekiya

筆者は通信ソサイエティが発行するレター誌である IEICE Communication Express (ComEX) の編集委員長を仰せつかっております。本ソサイエティが所属する電子情報通信学会は「電子情報通信および関連する分野の国際学会として、学術の発展、産業の興隆並びに人材の育成を促進する」ことを目的として設立・運営されています。ComEX など学術論文誌はその目的達成のための中心的役割を担っています。論文誌に掲載される学術的進展が学会における知の蓄積となり、それが「学術の泉」を育み本分野の発展につながっていく、という点に異論はないかと思います。ところが、近年通信ソサイエティが発行する論文誌への投稿数減少が顕著になっており、残念ながら ComEX も同様な状態にあります。この投稿数の減少は、大学、企業によりません。大学からの投稿減については本誌 2018 年冬号の巻末言「不採録は採録への第一歩」に議論を譲りたいと思います。

さて、そもそも学会がなぜ論文誌を発行するのでしょうか？それは、上述の学会の定義に照らせば、論文誌を通じて「学術の発展」、「産業の興隆」、「人材の育成」を促すためと言えます。筆者はただか 20 年強の研究歴しかありませんが、その中でも技術が一巡し昔の技術に回帰する、というケースを何度も目撃しています。例えば、ハードウェア処理能力の発展により、過去には切り捨てられていたアルゴリズムが再注目され、実システムに搭載される一などはよく聞く話です。このようなとき、我々のよりどころとなるのは「学術の泉」であり、論文誌は本分野に関連する研究者、開発者にとっての共通の財産であると言えます。

通信ソサイエティがカバーする分野は産業界と大学界が両輪となって技術的進展をけん引していかなければならないことは明白です。ところが、「今の企業には論文を執筆する余裕がなかなか取れない」という話をよく耳にします。論文執筆は会社の収益に直結しないという考えが根底にあると思われ、短期的に考えればそのとおりかと思います。しかし、企業が論文発表から目を背けてしまうと、本分野の「学術の発展」にブレーキがかかることは容易に想像がつきます。それが大学での活力

の低下につながり、学生離れが起き、最終的には人材難により本分野の「産業の興隆」に影響を及ぼすかもしれません。このようなサイクルは長い時間をかけてボディーブローのように効いてきます。気付いたときは手遅れになっているかもしれません。上記は極論ではありますが、かといって空論でもないと感じています。通信ソサイエティのカバーする学術分野が今後も継続的に発展していくためにも、学会の「学術の泉」が常に潤っていることが重要であると考えます。その意味において、大学、企業を問わず新しい技術はぜひ論文として発表し、泉の中に残して頂ければと思います。

ところで、雑誌の発行形態が印刷物から電子化への発行に移行し、読者にとって論文との接点が大きく変わりました。昔のように（私の世代が最後でしょうか…）冊子を手に取りぱらぱら流し見ることはほぼ皆無となり、キーワード検索をかけ、直接個々の論文にアクセスするようになりました。そうすると、幅広いキーワード検索にかかるだけの十分な量の論文を掲載し、更に論文の可視性を高めることが雑誌の評価に直結することになります。

本号「IEICE Communications Express (ComEX) 編集委員会からの提案と特集号のお知らせ」の中にありますように、ComEX は「速報性」にその特徴があり、雑誌としての個性だと考えます。「将来性」を評価軸に入れ、光る部分を見逃さず、積極的に掲載する編集を目指しています。また、オープンアクセスとしておりますので、可視性も確保できております。（もちろんまだ不十分であり更なる努力は必要です。）ComEX ではページ数、図表の数を制限しており、執筆者にとっては短時間で投稿準備ができます。その意味で、アイデアベースの段階でもその提案を世界に先駆けて発信する、（企業の皆様の時間が限られる中でも）短時間の執筆作業により学会の「学術の泉」の中にその足跡を残しておく、その場として ComEX を是非御活用下さい。本号内で告知させて頂きましたように、現在特集号を企画しております。普段投稿をしゅん巡される方も、これを機に是非投稿を御検討頂ければと思います。

まずは気軽に ComEX へ投稿してみませんか？